

思春期に生徒と教師が理解し合いにくくなる理由と、 対策についての一考察

——スクール・カウンセラーの配置に関連して——

岸本 弘

はじめに

さきごろわが国で思春期の中学生の、いじめが原因の自殺が相次ぎ、問題になった。そしてその度に担当の教師や校長などの「子どもがそんなところまで追いつめられているとは知らなかった」「いじめにも気づかなかったため、自殺を阻止できなかった」等々の弁解の言葉が繰返された。そのため、プロの教師たるものがそんなことではと、教師に対する不信感がジャナリズムを中心に吹き出した。私の教えた学生の中にも教師や親に理解してもらえず悩んでいる友人を眼の当りにして、将来そういう子どものよき理解者になってやりたいという動機から、中学の教師になる決心をした者は決して少なくなかった。そうした気持ちから教師になったはずのヴェテランの教師たちが、何故肝心の自分が担当している生徒のいじめに気がつかず、子どもの自殺をとめる事が出来なくなるのだろうか？ 今回の神戸の土師淳君殺害事件でも、殺人した少年と担当教師らの間には、意志の疎通は殆んどなかったようだ。そして両親も自分の子どもが連続殺人を犯しているのに気がつかなかった。ある程度気がついていたのは友人達だけだったらしい。

このようにこの時期に両者間に意志の疎通が出来なくなることが一般的傾向であるとしたら、偶然そうなるのではないだろう。人間は個別的存在であるから、お互いがお互いを完全に理解するなどということはあるにないが、この時期になると両者間に特にこのような離反的な不理解が生ずる。ならばこの時期にそうなる（あるいはそうならなければならない）ははっきりとした理由があるに違いない。この点について、少し考えてみよう。

I 教師と生徒が理解し合えなくなる理由

1. 人間の記憶についての最近の研究

先ず、われわれの記憶の運命について考えてみよう。われわれはわれわれの記憶はかなり正

確なものだと思いがちだが、果たしてそうだろうか？ これについては、アメリカのウォーターゲート事件の時のニクソン大統領の補佐官ジョン・ディーン⁽¹⁾の証言を分析したウルリック・ナイサーの研究が参考になる⁽¹⁾。1973年にディーンは事件のもみ消し工作を調査していた米上院の委員会で、その9ヶ月前の大統領執務室での会合の際に大統領と交わした会話について証言した。後になってこの会話が録音テープにかくし取りされていたことが解った。ナイサーがこの証言とテープの二つをつき合わせてみると、「人間テープレコーダー」と呼ばれるようになったほどの記憶力抜群のディーン⁽¹⁾の証言も、事実⁽¹⁾に忠実かどうか—誰がどこに座って、誰が何を言ったか等々—という点では、とても正確とはいえず、記憶が作り直され再構成されている跡がボロボロ見つかった。しかしもみ消し工作があったことそのことについては、証言していた。僅か9ヶ月前のことなのに、どうしてこんな齟齬⁽¹⁾が起きるのだろうか？

それは一つにはわれわれ人間の記憶装置が正確な記憶という点では、かなり不完全な装置だからであろう。ヒトの記憶容量に限界があることは種々の実験等で確かめられてきている。よく知られているように、普通のおとなの単語の暗記能力は（7プラス・マイナス2）、つまり9単語が限界である。それ以上のことを私がいうと、相手は正確にそのとおりに記憶できないということを示している。そして「なぜ思考は直列的に流れるように思えることが多いのだろうか？ それは記憶容量を使い果たしてしまうと、必ず今考えていたことが以前に考えたことを押しのけてしまうからである。」更に昔から心理学上“ああ解った！”体験といわれてきたように、なぜわれわれは新しい考えをどうやって得たのか自分ではよくわからないのだろうか？ 「それは難しい問題を解く時には、問題を解くことそのものに短期記憶が使われ過ぎてしまって、短期記憶自体がしたことを細かく覚えておく時間も余裕もないからである。こうしてわれわれは難しい問題を解き、あることを洞察しても、どうやって解き、どうやって洞察したかは解らずじまいになり、解く前の自分の状態がどのようなであったかもよく思い出せなくなる。「なぜなら自分が今認識しているものに比べると、そういう記憶でも自分の見たものがはっきり思い出せないからである」⁽²⁾。

そのうえ、われわれの脳そのものが変化し、発達しているから、脳に蓄積されているもの（記憶）も、テープレコーダーに記録されたもののようにじっとしているわけではなく、たえず動き、作り直され、変化し、発達している。この長期記憶については、ジャン・ピアジェの2歳の時の誘拐未遂事件にまつわる有名なエピソードが参考になる⁽³⁾。彼は思春期まで、男が自分に襲いかかってきて、乳母が彼を守ろうとして男ともみ合いになり、顔に引っかき傷をこしらえた誘拐未遂事件をはっきりと記憶していた。しかし彼が15歳の時、乳母から両親に、その誘拐未遂事件は自分のでっちあげたものだったという告白の手紙が届いた。ピアジェには自分の記憶はきわめて鮮明で真実だという確信があったが、それは事件が本当に起きた証拠ではなかった。

このような人から聞いた話の内容は覚えているのに、いったいどこで誰から聞いた話だったのか覚えていなかったり、話を聞いたことすら忘れてしまう「無意識の剽窃」という現象には、われわれも日常よく見聞することがある。本当は写真やフィルムや人が言った話で植えつけられたものなのに、自分でじかに体験したことだと信じるようになり、そのニセ物の記憶はきわめてリアルなものに仕上っていく。エリザベス・ロフタスは、暗示を受けると本当にはないのに、われわれには、口ひげでもちぢれ毛でも、割れたガラスの破片でも、あるいは黒い車でも、その他なんでも見えてきて、はっきりとしたイメージとして記憶されていくことを実験で示している。

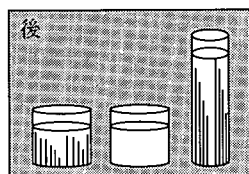
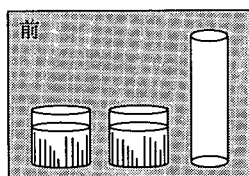
ナイサーは、前述のディーンの齟齬の原因は、彼が自分を実際よりは重要な人物と考えていて、その会合で大統領から開口一番ねぎらいのことばをかけてもらいたかったのに肩透かしを食らったことを自分の記憶に書きこんだことから起こった。ディーンの証言はこうあってほしかった、こうあるべきだったという9ヶ月間の空想の産物だった、と結論している⁽⁴⁾。

2. われわれの小さい時の記憶

ジョン・コートルもいっているように、われわれは小さいころ、だいたい3、4歳頃の、それも極めて鮮明な記憶を持っている。しかしこの小さい頃のそのままのようにみえるその記憶が、実際に自分が小さな子どもだった頃まで辿れ得て、その時に記憶されたものと全く同じものを再現しているかは、ディーン補佐官やピアジェの例からみてもたいへん疑わしい。小さい頃の記憶が疑わしいのは、そういう記憶がとても「小さい子どもの能力では感じたり、考えたりすることもできそうにもない、もっと年のいった人の目を通して見たり、感じたりしたもののようにになっていることが多いことである」⁽⁵⁾。しかもその見たり感じたりしている人物が、その情景の中央に近いところに登場していることである。そのような記憶は自分の成長にとって重要だったからこそ、たえず思い出され続け、その度にその年齢にふさわしい解釈も加って記憶され続けてきた、ディーン補佐官が作り直したものに似た記憶と考える方が正しいだろう。「小さい頃の経験をそのまま想起するには昔覚えたことを探しだし、その頃の自分の心がそれにどのように反応したかも再構成出来なければならない。ところがそんなことは自分がもう一度その子どもの頃に返れるのでなければ、出来るはずもないことだからである」⁽⁶⁾。

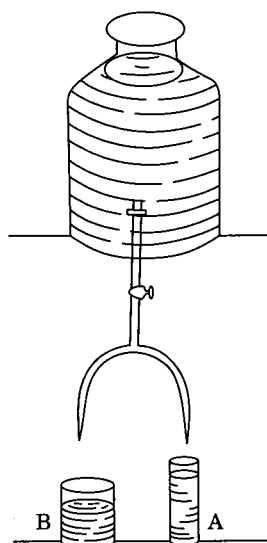
3. ピアジェの研究

「おとなになってから、子どもの時の目を取り戻すことは不可能とはいわないまでも、いかに難しいかということを見事に示しているものに」⁽⁷⁾、ピアジェのあの有名な「保存性についての実験」がある。左図のように、背が低くて横に広いコップから丈の高い細身のコップに水に移しかえると、小さい子どもは中身が増えたと信じてしまう。また右図のように管についているとめ金を操作して水を流し、同時に止めても、小さい子どもは丈の高い細身のコップの方で長い時間水が流れていたと信じてしまう。



5 歳児の典型的な答：
「細いびんの方が多い。」

7 歳児の典型的な答：「同じ
だよ、だって同じ水だもの。」



時間を扱った実験

(この課題の解決には11歳頃までかかる子がいる。)

ピアジェがこの実験結果を発表した時には、まさに青天の霹靂、世界中の心理学者が「まさか」と考え、多くの国で、いろいろな方法で盛んに追試が繰り返されたが結果はいつも同じだった。心理学の世界ではすっかり定着したが、この発見のために人類は20世紀までかかっている⁽⁸⁾。今でも学生に授業で話すと、みんなびっくりする。学生たちも少し前までは実験の子ども達と全く同じようにそのことを信じていたのに。われわれは発達して、「以前の視点とは接触がなくなると」、ある発達心理学者がいったように「さなぎからかえった蝶は、さなぎだったことを忘れてしまい、自分のはじめから小さな蝶だったと記憶してしまう」ようだ⁽⁹⁾。したがって子どもの世界は常に新鮮に映り、われわれは児童心理学や青年心理学という分野を独立させて、「まるで処女地のように」、児童期や青年期を探索せざるを得なくなるのも、無理な話ではない。こうしてわが国でも優れた青少年期の研究が、積みあげられてきているわけだ。

4. おとなの記憶の研究

しかしおとなになってからも、ちょっと前に考えていたことを忘れずにいて、正確な記録として取り出すことは、ディーン補佐官の例からみても非常に難しいらしい。たとえばアメリカで、1972年と76年に政治意識—共和党支持か、民主党支持か、無党派か—の調査を行い、76年には前回の回答内容についても思い出してもらった調査がある。その結果この4年のあいだに実際に支持政党の変った人のうち、支持政党は変わっていないと答えた人が実に91%にもなった。彼らは、記憶のなかでは「いつも」共和党支持であり、民主党支持であり、無党派だったのだ。同じような結果が、所得水準、薬物使用、個人的性向、更には頭痛の痛みの程度に関する記憶調査でも得られている⁽¹⁰⁾。われわれは、人生の流れの中で、記憶の流れのなかで

新しい自己が現われると、現在の自己にひきよせて考え、今の自己が永久に変わらぬものになりたいと願うらしい。

5. 記憶力抜群の人々

しかし、たとえば、黒板に書かれた文字をたった一回読むだけで暗記できる子どもや、美術館に飾られた絵をまるで傍にいた如く思い出したり、過去10年間のカレンダーの曜日をたちどころに言い当てるカレンダーボーイ等々、記憶力抜群の子どもがいる。しかしナイサーは、このような特異な能力も思春期が終わる頃までには姿を消す場合の方が普通だといっている⁽¹¹⁾。日本にも「十で神童十五で才子二十過ぎればただの人」という諺があるように。もっとも思春期を過ぎても、トスカニーニのように250曲の交響曲のすべての楽器の音符と、100曲のオペラ作品の歌詞や楽曲を晩年まで暗記していた人や、17時間かけて円周率を初めから4万桁まで正確に暗唱してみせた日本人の友寄英昭。その他記憶力抜群のおとな達の例が昔から報告されている⁽¹²⁾。残念ながらこういう天才的な記憶の実態については、まだよく解っていない。

しかしこの点ではアレキサンダー・ルリアが研究した、ロシア人新聞記者シェレシエブスキーの例が参考になる。彼はたとえば、ゆっくり読んでもらうと70単語を4分間で暗記（普通の人の記憶力は 7 ± 2 単語）し、しかも15年後に初めからでも後からでも全く正確に暗唱できた。彼の悲劇は、記憶の中から一部を捨て去ろうとしてもそれが殆んど不可能で、長年の間に具体的なイメージが積み重なって、具体的なことを一般化したり、抽象概念をこしらえたり、あるいは頭の中で細部を総てまとめあげたりすることができず、とうとう最後には彼を圧倒するまでになった。ほんのちょっとしたキューを与えるだけで具体的な記憶がどっと甦って来るので、日常の仕事を続けることも本を読むことも、更には簡単な会話にさえもついていけなくなった。晩年は、単語リストを暗記するという特異な才能を見せ物にして、町から町を渡り歩くだけの人生だった⁽¹³⁾。むろん前述の並外れた記憶の持ち主でも、多くは彼のような問題をかかえることもなく、具体的なことを一般化させるのに困難を来すことはない。しかし彼の話は、もう一つの能力、具体的なことを一般化する能力を発揮させるためには、前に記憶した具体的なイメージの中から不必要なものを捨てる、つまり新しいことを覚えるためには別のことを忘れなくてはならないという真理を示してしる。

このことは感情的なことについても言えるだろう。もし失恋の記憶を完璧に持ち続けたら、新たな観点から再構成したり、新たな観点と入れ替えたりすることが出来なかったら、いつまでもその感情が心の中をさ迷い続け、心の痛みは何年経っても深く心に突き刺さっていて、そこに凍りついて変化することも成長することもできなくなるだろう。スピッツやボウルビーは生まれて間もなく母親に拒絶された（マターナルデプリベーション）心の痛みに凍りついたまま変化することも、成長することもできず、遂に息をすることもできなくなって、死に向って暴進する乳児院のこどもの例について述べている⁽¹⁴⁾。

6. 外国人のアクセント

ここでちょっといわゆる「外国人のアクセント」についてのマーヴィン・ミンスキーの説明を聞いてみよう⁽¹⁵⁾。おとなが外国語を学習する時、文法や語彙は殆んど完全にマスターしてしまうことは珍しいことではない。しかし10代を過ぎると殆んどの人がどんなに長い間どんなに一生懸命に学んだとしても、新しく習う外国語の発音の方は完全にまねできるようにはなることはない。別の言葉でいえば外国人のアクセントでしかしゃべれない。

このように思春期以前にはたくさんの違った発音が身に付くのに、思春期以後になると新しい発音を身につけるのがずっと難しくなってしまうのは、決して偶然ではないとミンスキーはいう。子育ての時期が始まるのは、生物学的にみると、その個体の社会的役割が学ぶ側から教える側に変わる時にあたる。この子を生み、子育てをする親になる準備をし始める思春期に、発音の学習が抑制され始めることの進化論的意味は、子どもの発音による話し言葉を単純に親が学べないようにすることによって、その替わりに子どもにおとなの発音による話し言葉を学習させることにある。もし親が子どもと同じ発音による話し言葉で話すことができたとしたら、あるいはそれでコミュニケーションする方が簡単ならば、親が子どもの発音のまねをしてコミュニケーションをして、子どもがおとなの発音をまねする動機も機会も失ってしまう。すなわち子ども一人ひとりが別々の言語音を身につけてしまうのであったら、人間の社会生活を成立させる原因となった、公に通用する共通言語などというものは、もともと進化し始めることなどなかったはずである。恐らく性的な成熟をもたらすような遺伝的にコントロールされた何らかのメカニズムと同じものが、この時期になると新しい発音の聞き分けや発音の仕方を学習する特定のメカニズムの能力を低める働きもしているのではないか？ もしこの仮説が正しければ、発音の学習を抑制するための思春期と結びついた遺伝子は、人間的な社会生活を成立させた言語が進化するプロセスの比較的早い時期に形成された可能性があるといっている。このようにわれわれは一旦おとなの発音の仕方を覚えてしまったら、その前の自分がどのような発音をしていたかも解らなくなってしまう。ちょうど難しい問題を一旦解いてしまったり、ノイローゼを克服してしまったり、どのようにして解決し、克服したか、また解決、克服する前の自分がどのようなであったかももう解らなくなってしまうように。

7. 万物の霊長の記憶装置

以上のように考えてくると、われわれの記憶装置がテープレコーダーなどとは違って、新しいことを記憶するためには別のことを忘れなければならないような不完全な(?)装置になっていること、すなわち社会的役割が学ぶ側から教える側に変わる思春期に子どもの感じ方や思考の仕方を忘れさせ、特に思い出せなくしている進化論的意味もみえてくる。それはいわばさなぎから蝶にかえるむづかしい課題にとりくみ解決しようとしている思春期の子どもの感じ方や思考の仕方を、既にその課題を解決し蝶になったおとなや、親や、教師に単純に思い出させ

なくして、替わりに蝶にかえろうとしている子どもにおとなの感じ方や思考の仕方をできるだけ有効に学習させるためである。もしおとなや教師になってからも子どもの目が簡単に取り戻せるなら、親や教師の方が子どもの感じ方や思考の仕方に妥協して、子どもがおとなの仕方を学習する動機も機会も失ってしまうかもしれない。すなわち子ども一人ひとりが別々の道徳観や生き方を身につけてしまうのだったら、人間の社会生活を成立させる原因となった、公に通用する道徳観や法律等の文化は、もともと進化し始めることなどなかったはずである。恐らく性的成熟をもたらすような遺伝的にコントロールされた何らかのメカニズムと同じものが、この時期になると過去を記憶する特定の装置の能力を低め、自己にひきよせて記憶する装置の能力を高める働きもしているのではないかと私は思う。そして「遺伝子はいいたい正しい時間に正しい場所に記憶装置のそのような新しい層を提供するというヒントを与えて、このプロセスを助けてくれている」のではないかと。われわれが厳しい進化のふるいをくぐり抜けて、万物の霊長となりえたのは、そのような記憶装置のおかげだと思う。

Ⅱ 各国のいじめに対する取組み

いじめは、むろん日本だけの問題ではない。1996年6月にはイギリス、ノルウェー、スウェーデンなどの関係者が参加した、いじめ問題国際シンポジウムが東京と大阪で開かれている。それによるとたとえばイギリスでも16歳以下の子どもの自殺のうち、いじめが原因とみられるものが年間10件以上に達し、転校によって解決がはかられる例も後を絶たない。対策も後手に回りがちで、頭を痛めているが、その中で現在最も注目されているのがABC（Anti-Bullying Campaign）とよばれる、希望する生徒が訓練を受けて活動するカウンセラー活動である。カウンセラーになるには親の了解が必要だが、生徒なら誰でも応募でき、プロのカウンセラーの面接を受け、生徒達の選抜委員会の意見も加えて選ばれ、三日間専門家から基礎的訓練を受ける。相談を受ける中で、彼らが最も強調する点は秘密厳守で、先生にコントロールされている組織だと思われては生徒から信頼を得ることは出来ない。いじめる側の生徒も自分達が生徒カウンセラーに責められるわけではないことが解ると、自ら相談室に来て、カウンセラーと一緒にになってなぜ自分がいじめるのか考え始め、はじめて心が開かれるという。むろんあくまで教師や親とともにいじめを考えていく手段の一つで、深刻なケースは生徒の手を離れ先生やプロのカウンセラーの手に委ねられる。シンポジウムでもこれによって学校全体にいじめを許してはならないという意識が浸透し、生徒カウンセラー達も自分自身人間関係に自信が持てるようになったと報告し、注目された⁽¹⁶⁾。

一方アメリカでも従来犯罪や麻薬、学力低下などの問題に隠れていじめは目立たなかったが、いじめによる子ども同士の発砲事件の多発や日本のいじめ問題が報道されたりしてにわか

に関心を集め、各州とも様々な対策を試み始めている。アメリカでも従来いじめや暴力事件が起きると、まず加害者と被害者を引き離し、時にはイギリスとは逆に加害者の方を転校させるような「被害者保護」に重点が置かれていた。しかし「加害者を排除しても、転校先でいじめを繰り返せば被害は拡大するだけ」だから「被害者対策も大切だが、いじめがない環境、早期解決ができる環境作りが必要だ」との考えから、生徒を参加させ、いじめ撲滅への「攻め」の姿勢が目立つ⁽¹⁷⁾。

たとえばスクール・カウンセラーが配置されているカリフォルニア州では、そのスクール・カウンセラーから訓練を受けたピア・ヘルパーやコンフリクト・マネジャーと呼ばれる生徒カウンセラーが、必要があれば兄姉のような立場で困っている生徒の話し相手となる。紛争が起きると両者の話を聞き解決の手助けをしたりする。ピアというのは同列の仲間で、アドバイスをするというよりは、問題が一人の心のなかの葛藤であれ、対人関係であれ、話合いを通じてきちんと問題点が見えてきて、相手の気持ちが理解し合えるようになるという点に重点が置かれている。その場合生徒の健康や存在自身が危険にさらされる時、すなわち具体的には児童虐待、あるいは自殺の恐れ、また他の生徒に危険をおよぼす、この三つのケースを除いて生徒間の守秘義務は堅く守られる。したがって生徒達は問題が起きると、安心して気の合った生徒をヘルパーに指名して相談にのってもらえる。

そして彼らのもう一つの重要な仕事は、クラスガイダンスの一部として緊急な問題が起きると、その問題点を生徒達にプレゼンテーションして、みんなで考え、問題が二度と起こらないように予防する役割を果たすことである。たとえば生徒が自殺したような場合、スクール・カウンセラーがピア・ヘルパーを集めて、生徒たちにこの問題をどのようにプレゼンテーションするかについて話しあう。そして教室に行ったらたとえばあるヘルパーが「自殺とは何ぞや」ということについて話すと、二番目のヘルパーが自殺志向の人が前もって示す警告やサインについて話す。そして更に他のヘルパーたちが自殺を考えている人、その話を聞いている人等になってロールプレイをしてみせる。最後にヘルパーがそこに出席している生徒たちに自殺ということについて彼らが得た知識や、自殺についての理解がきちんと出来たかどうかを確認する。既に述べたように自殺というような大きな事件が起きると、生徒達の間にはおとなとはまた違った、悲しみだけではなく、その他おとなたちが忘れてしまっているさまざまな感情が生じる。そういったものに効果的に対応しながら、これを未然に防ぐ為にも、スクール・カウンセラーは、ピア・ヘルパー等の生徒側の協力がどうしても必要だと考えているわけだ⁽¹⁸⁾。

更に高校ではこのピア・ヘルパーやコンフリクト・マネジャーなどから一步踏みこんで、生徒が調停役にあたるので「仲間調停」とよばれる、家庭内紛争や金銭トラブルの解決手段としてよく利用される「調停」を、校内暴力やいじめ対策に取り入れる学校が80年代後半から増え始め、今や全米で2,000校に及ぶ。子ども自身が調停員になった方が、今起きているいじめを

解決するだけでなく、おとなになってからのいじめをなくすためにも効果的だと、たとえばニューヨーク市のジョン・ジェイ高校では、毎学期4,5人の生徒に調停方法を教え、調停員としてトラブルの解決にあたらせている。調停員に求められるのは「他人の意見をじっくり聞き、感情的にならず、公平であること。感情を静めながら問題点を浮き彫りにするために、当事者が興奮して話す内容を、普通の言葉に言い換える。調停員は結論を出さず、当事者同士に解決策をみつけさせる」ことである。いじめや暴力の防止にも、このような「相手の気持ちを積極的に聞き出す、アクティブ・リスニング」や「会話技術（バーバルスキル）」などの調停テクニックは効果的で、たとえばアリゾナ州ではこの調停導入で校内暴力が半減した。「社会が暴力ではなく、言葉で成り立っていることを学ぶのに『調停』は絶好の教材」と考えているわけだ⁽¹⁹⁾。

日本でも前述の「国際シンポジウム」を機会に海外にも眼を向け、イギリスのABCを取り入れたり、また教師と生徒の「いじめを考える集い」を毎週開催、パネルディスカッションを開き、昼の校内放送で放映等さまざまな試みがなされ始めている。たとえば、東京の山の手の住宅街にある杉並区立東田中学でも道徳、学級活動、社会などの時間を使って、全クラスで「いじめを通じて生徒一人ひとりが心の根っこを掘り下げる」試みに30時間をかけ、生徒らは、作文を12回書き、読み、話しあっている。

一方、いじめ対策でも先進国といわれるスウェーデンでも、学校長に自校のいじめ対策に関するプログラムを作ることが義務づけられている。学級は三人担任制で、全教員で10人ずつ受け持ち、クラスの男女生徒各一人のいじめ担当委員と一緒に、校内の雰囲気をよくすることに力を注いでいるが、その活動の中核をになっているのがカウンセラーで、彼らは教師と対等な関係を保ち、外部のおとなの協力も仰いでいる⁽²¹⁾。

以上さまざまな先進国の新しい試みについてみてきたが、これらの試みに共通するところは、教師以外の専門のカウンセラーを配置し、生徒たち自身にも考えさせる、あるいは生徒同士で考えさせるようにしていることであろう。

Ⅲ 今後の進むべき道についての考察

さて日本でもいじめや不登校対策として、公立小・中・高校へのスクール・カウンセラーの配置が試験的に始まり、1997年度には1,000校に拡大され、臨床心理士などの専門家が週2回、学校で児童、生徒の相談にあたっている。神戸の土師淳君の事件の時も、その小学校及び周辺の小学校に急ぎょカウンセラーが派遣された。評判はまずまずだが、中には勤務の初日、校長に「何も期待しない」とよそ者扱いされた者もいる。校内連携一つ取れないようでは、地域ぐるみによるいじめの克服はおぼつかないと、心配するむきもある⁽²²⁾。

1. アメリカのスクール・カウンセラー

スクール・カウンセラーの先輩国アメリカと日本との大きな違いは、アメリカでは分業が進んで、常駐のカウンセラー以外にも、資格を持つ臨床心理士、家族療法士、臨床ソーシャルワーカー等がそれぞれの専門分野を担当して活動していることである。たとえば登校拒否の問題でも、学校にはスクール・カウンセラー、日本のホーム・ルーム担任に近い仕事をしているアドバイザー教師、それに教頭をメンバーとする点検チームがあり、その必要があると判断されると、まずカウンセラーが学校か家庭に行って原因について話し合い、三者で登校させる環境作りについて検討する。しかし何か深い原因があるということが解ると、スクール・カウンセラーは前述の個人で開業しているカウンセラーやセラピストを紹介して長期療法で取り組んでもらう。これ以外にも長期欠席や無断欠席やどうしても出てこない生徒等、登校拒否のひどい件だけを調べている児童福祉・登校相談員という専門家がいる、彼らが家族と相談して登校出来る環境作りについて相談にのっている。この他子どもの知能の面、学業の面でもテストをしたり、いろいろな測定をしたりして、学習困難児を発見してそれに応じたクラスに配置する活動をしている、スクール・サイコロジストもいる。そのうえに希望する生徒の中から各州で名称は違うが、ピア・ヘルパー、コンフリクト・マネジャー、ピア・ミジエーター等の、いわば生徒カウンセラーを選んで彼らとの積極的な共同活動も取り入れて、学校生活がスムーズにゆき、生徒が学習しやすい環境を作るように計画されている⁽²³⁾。

しかしアメリカでも、今日スクール・カウンセラー等のしている仕事のすべてを当初は教師が担当していた。アメリカが農業社会から急激に工業社会に移行していく際、まず①進路、職業、就職指導等をすることが必要となり、多少知識のある教師が先ずこれを担当した。ところが1957年ロシアのスプートニク打ち上げに直面し、政府が科学技術の遅れを取り返すために②進路・進学指導を専門に受け持つ教師の養成に、ガイダンス・カウンセラーの名でのりだす。更に60年代に入ると、生徒の③精神衛生や④社会的適応の問題が課題となり、教師とは別に以上の四つの部門を専門に担当する現在の「スクール・カウンセラー」が養成されるようになった。今日公立学校のスクール・カウンセラーになるためには、2年間のカウンセリング・サイコロジの学習と実地研修のいわゆるインターン課程を修得する必要がある。

これらのスクール・カウンセラーは、もちろんいじめ、不登校、セクハラなど個々の深刻な問題に直面している生徒の救済にも対処する。がしかし彼らの本当の仕事は教師、特に教師兼アドバイザー（カウンセラーの仕事を補う仕事をする教師）はもちろん2、3校を受け持つスクール・ナース（わが国の養護教諭にあたる）、ピア・ヘルパーなどの生徒達、更には地域の精神衛生機関、社会福祉機関や警察、司法機関、場合によっては親などを動かして、これらと協力して、学校の体質を改善して子ども達が学び易い環境を作ることを主眼とする専門職である。現在各学校に配置することが義務づけられているわけではないが、たとえばカリフォルニア

ア州の場合殆どどの小学校では1,200人の児童を担当し、中・高校では400人を担当するカウンセラーが配置されている⁽²⁴⁾。こうして当初は今日カウンセラー達がしているような仕事をすべて背負い込んでいたアメリカの教師達は、社会が多様化する中で派生してきた解決が困難な問題はそれぞれの専門家に受け持ってもらふことによって、自分は自分自身の専門の「教える」という仕事に専心出来るようになった。

2. われわれのすすむべき道

日本の教師は、アメリカやスウェーデンに比べて、2倍から3倍の児童、生徒を一人で受け持っている。その日本では教師たちは「教える」専門家というよりは、「学校」の専門家、すなわち学校で起こることは総て取り仕切れなければ、プロの教師、特に校長とはいえないと考え、また外部の者も考えている。それが前述の校長の（よそ者）のカウンセラーへの発言となって現われているともいえる。「その意気やまさに壮」というべきだが、ある校長は「教育の現場では、いじめは絶対にあってはならないことだと言われてきた。いじめとなれば、マスコミは騒ぐし、教師も父母も神経質にならざるを得ない。いじめという言葉は、それだけ特別な意味を持っている」と言っている。いじめはゼロに出来るのか。いじめという言葉の指す範囲は幅広い。子どもたちが関係をつくるためにぶつかり合うものもあれば、リンチ、迫害そのものもある。いじめかいじめでないかの境界もはっきりしない。現在実際に子どものいじめを認めるか否かをめぐって、学校、教育委員会と父母が争っている例もある⁽²⁵⁾。プロの教師、校長として自分のクラス、自分の学校にはいじめはあるはずはない、あってはならないという形にのみこだわって、自殺まで招いている子どものいじめの本質は却って隠されてしまうことになりかねない。その自信がほころびはじめていることを示し始めているのが、子どもの自殺が起こった場合の、冒頭で述べたような判で押したような学校側の弁解であろう。そして外部からの批判、非難であろう。相手はあくまでも子どもであって、おとなではない。却って彼らの方がナイーブな感情、思考をしているかもしれない。彼らの感情、思考生活から派生してくるさまざまな問題については、それについての専門家の参加が必要になっている。その一つがスクール・カウンセラーの導入であろう。

この時期の子どもたちには、指導者として人生経験の豊富な教師や両親が必要なことは、いうまでもないことである。たとえ子どもたち自身の設定した目標が適切であったとしても、そのリーダーである子どもの人生体験はその集団を正しい方向に導くには余りに不十分である。したがって、いわばすぐさま無政府状態になったり、袋小路に陥り易い。この時期のどんな子どもの集団の生活や活動にもわれわれの祖先がやってきたように、常に人生経験の豊富な年上の世代の参加が必要である。われわれの現代の集団ではそれが教師である。しかしその教師はこの時期の子どもが直面している困難な発達課題をまがりなりにも解決し、既に子ども達の心理状態からは遙かに遠くに行ってしまうている。しかもその教師は普通かなりの人数の子ども

を一人で担当しており、またその仕事も極めて多忙で知的知識の伝達に忙しい。つまり彼らはあくまでも指導者であって、自分自身の青少年時代の心の状態にまで遡って、彼らの心の状態そのままを理解し指導しようと思っても、それはどだい無理な話であることを先ず知るべきである。むしろ同等ではなくなって発達して遠くへ行っていることは、指導者としての欠くべからざる条件であることについても纒々述べてきた。そしてアメリカのスクール・カウンセラー誕生の歴史が示すように、複雑になってきた現代社会では教師だけでは子どもの発達過程の指導総てを引き受けることが出来なくなっている。今後教師に求められる資質は、スクール・カウンセラーや養護教諭等と協力し、生徒カウンセラー等生徒側の能動的な活動を刺激、奨励し、組織することであろう。そしていじめをなくすることはもちろんのこと、その活動によって生徒達の将来の生活の有効な準備たらしめることであろう。特にその資質は、今後、校長に求められること大であろう。

注

- (1) 佐々木正人「記憶とからだ」伊藤正男、佐伯胖編『認識し行動する脳』東京大学出版会、1988年、P243-245
- (2) ミンスキー、M. 安西祐一郎訳『心の社会』産業図書、1986年、P229
- (3) コートル、J. 石山鈴子訳「記憶は嘘をつく」講談社、1995年、P55
- (4) 同上、P54
- (5) (6) ミンスキー、M. 前掲書、P234
- (7) コートル、J. 前掲書、P227
- (8) 拙著「心と発達」学文社、1993年、P55-59
- (9) (10) コートル、J. 前掲書、P234
- (11) (12) (13) 同上、P87-93
- (14) 拙著、前掲書、P104-105
- (15) ミンスキー、M. 前掲書、P391-392
- (16) 「いじめ克服仲間が相談員」朝日新聞、1996年9月30日
- (17) (19) 「暴力許さず一米国の場合」朝日新聞、1997年2月3日
- (18) (23) (24) ヤギ、D. 「スクール・カウンセリングを考えるⅡ」国際セミナー講演記録、市川市教育センター、1996年6月29日、P1-19
- (20) 「心の中の『いじめ』をみつめて」朝日新聞、1997年2月24日
- (21) 「編集手帳」読売新聞、1996年12月25日
- (22) 「『カウンセラー』1000校に」読売新聞、1996年12月25日
- (25) 「解決すれ違い、傷口広げる」朝日新聞、1997年4月28日